

弘前高等學校
教授 三浦圭三 著

古今和歌集新講

東京 天泉社

昭和十八年十月二十五日印刷
昭和十八年十月三十日發行 (1000)

日本出版會
ア 470862

古今和歌集新講

東京都神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社

定價 金八圓八拾錢
特別行爲 金四拾錢
稅相當額

合計金 九圓貳拾錢

著者 三浦圭三

發行所 東京都神田區猿樂町二丁目八

小泉準一

東京都神田區錦町三丁目一五

印刷者 今成喜朔

東京都神田區錦町三丁目一五

印刷所 今成印刷工場

東京三三五四

東京都神田區猿樂町二丁目八

發行所 天泉社

電話神田二二三九番
振替東京五七〇二九番

古今和歌集新講 序

本書は私が年來微力を注いで來た古今和歌集に關する研究の内解釋に關する部面を壓縮要約したものであります。

本書は各一首毎に釋・譯・評・の三欄を設けました。

釋は難語句と注意すべき語句とを摘解し其歌に卽した語義職能を闡明し必要ある時は原義・轉義・通義にも及び又表現手法として注意すべきものは併せ舉げておきました。

譯は意譯と散文譯と現代語譯とを兼ねて一首の意味を平明に説き而かもなるべく原歌の形にそつた直譯的配語にも努めたつもりであります。

評は鑑賞批評の形式をとり各歌の文學史的位を考察する爲めに其題材・着想・表現の先驅的なもの、同時的なもの、派生的なものをしらべ 原歌・類歌・派生歌並に古今集的作品の主なるものを擧げまゝ古今集の影響に成る姉妹藝術作品に觸れたところもあります。これは又古今集一部の讀解によつて更に數十倍・數百倍の古今集的な歌群と作品群の理解に對しても有力なる手繋りとならうと存じます。

右、釋・譯・評とも努めて撰者の撰意と作者の作意に違はないやうにと心がけたつもりですが、果してうまくいつて居るかどうかと懸念して居ります。

私は去る昭和四年に 合 古今和歌集新講上巻を公刊致しました。下巻も引續き出すつもりで已に脱稿はしましたが書肆の都合で遺憾ながら其儘となりました。彼も此も似たやうな書名ですが彼は綜合に重きを置き此は新講に重きを置き尙且つ彼以後に思ひ得た私見をも加へておきました。此が爲めには古人・先輩の説々に對して批判を加へた箇所も尠くはありませんが、凡ては斯學推進の爲めと思召して僭越の罪は惡しからずお赦しを願ひます。

此書とても決して完璧を期して居る譯ではありません。凡そ學問研究に於て「完璧」といふことは生涯懸命になつても容易に期せられないものかと存じます。殊に淺學未熟の私ですからお讀みになつて直ぐお氣づきになるやうな誤解や失考が多々あることδεう。其節には何卒忌憚なき御批評御垂教をいただきますやう切にお願ひ申します。斯くして私自身啓蒙の恩恵に浴すると共に又從來他の分野に比して遜色多きこの古今集學が一步たりとも前進することは、確かに學界の慶びであるとも信ずる次第であります。

この一部を書く爲めにも、私は攝取不捨の態度を以て古人先輩は勿論、後輩の方々と雖も苟くも説

の採るべきは凡て之を參酌引用し爲めに裨補せらるゝところは尠くはありません。此等は其都度その旨を特記しておきましたがこゝに一括して謹みて敬意と謝意とを捧げます。その上本文の異本對校の爲めには更に廣く朝野の貴顯・要路の方々の御援助を賜はつたことも多く、今一々お名前はあげませんが他日「古今集研究恩賚目錄」を作成してその御好意を記念し、少くとも私の子々孫々には永久に感銘致させようと存じて居ります。

本書本文の底本は、私が嘗て數回教科書に採用して講義しました 貞應本系の櫻園書院本であります。

本書引用の書名は繁を避けて略稱を用ひた所が澤山あります。それは大抵おわかりになるものばかりですから、別に「凡例」などは入れておきません。

「古今和歌六帖」を「六帖」とし「神樂歌」を「神樂」とし「寛平の御時きさいの宮の歌合のうた」を「寛平中宮歌合」とし、歌集は多く 固有名部分のみをあげて「後撰和歌集」を「後撰」と様にし「物語」の二字を省いて 唯、竹取・伊勢・大和・うつぼ・源氏とし、川柳は單にその收載篇を數字であげて、例へば「川柳百廿九篇にある」といふことを「川柳一二九」としておきました。其他註釋書類で屢々引用したものは大體左記諸本であります。（下段は其の略稱であります）

教長卿

古今集註

教長注

法橋顯昭

古今集註

顯註

藤原定家

顯註密勘

密勘

北村季吟

古今和歌集抄

抄

契沖

古今集餘材抄

餘材

賀茂真淵

古今和歌集打聽

打聽

本居宣長

古今集遠鏡

遠鏡

藤井高尙

古今和歌集新釋

新釋

中村秋香氏

古今和歌集詳解

詳解

金子元臣氏

古今和歌集評釋

評釋

以上

昭和十七年六月九日

著

者

識

歌 詞 索 引

一 初句の五十音順に排列した。

二 下の括弧書に「長」とあるは長歌、「旋」とあるは「旋頭歌」其他は短歌である。

三 初句の同じものは更に二句につき、初二句の同じものは更に三句につき五十音順に排列した。

四 下の數字は歌の番號である。

例、「あかざりし 九九二」

は、九九二番の歌

「女ともだちと物語して、別れてのちに、遣しける

み ち の く

あかざりし袖の中にや入りにけむわがたましひのなき心地する」のことである。

あ

一五九首

あかざりし

九三

あかずして

八三

つきのかくるる

四〇

わかるるそでの

三六

あかつきの

六一

あかでこそ

七二

あかなくに

八四

あきかぜに

二六

あへずちりぬる

八三

あふたのみこそ

五八

かきなすことの

三三

こゑをほにあげて

二七

はつかりがねぞ

一〇〇

ほころびぬらし

七四

やまのこのはも

あきかぜの

ふきあげにたてる：

三三

ふきうらがへす

ふきとふきぬる

ふきにしひより

みにさむければ

あきかぜは

あききぬと

あきざりの

ともにたちいでて

はるときなき

はれてくもれば

あきざりは

あきくれど

いろもかはらぬ

つきのかつらの

あきくれば

あきちかう

あきといへば

あきならで

あふことかたき

おくしらつゆは

八三

八三

三六

五五

七五

一九

三六

五〇

二〇八

三六

三三

四三

一〇七

四〇

八四

三三

七五

三三

七五

あきなれば

あきのきく

あきのたの

いねてふことも

ほにこそひとを

ほのへをてらす

あきのつき

あきのつゆ

あきののに

おくしらつゆは

さきわけしあきの

つまなきしかの

なまめきたてる

ひとまつむしの

みだれてさける

みちもまどひぬ

やどりはすべし

あきののの

くさのたもとか

をばなにまじり

あきのやま

五二

二六

八三

五七

四八

二九

二九

二九

三三

六三

一〇四

一〇六

一〇三

五三

二〇二

三八

三三

四三

四九

三九

あきのよの

あくるもしらず

つきのひかりし

つゆをばつゆと

あきのよは：

あきのよも

あきはぎに

あきはぎぬ

いまやまがきの

もみちはやどに

あきはぎの

したばいろづく

はななきにけり

はなをばあめに

ふるえにさける

あきはぎも

あきはぎを

あきをおきて

あけたてば

あけぬとて

一九

一九

二五

二五

一九

四三

二六

二六

四三

二七

三〇

二八

三九

二九

一九

二九

二九

二九

二九

二九

いまはのころ 六八
 かへるみちには 六九
 あさぢふの 五〇
 あさつゆの 四三
 あさつゆを 四八
 あさなあさな 五五
 あさにけに 三六
 あさばらけ 三三
 あさみこそ 六八
 あさみどり 三七
 あしがもの 五三
 あしたづの 九八
 たてるかはべを 九八
 ひとりおくれて 九八
 あしびきの 四九
 やましたみづの 四九
 やまたちはなれ 四〇
 やまだのそほづ 一〇七
 やまのまにまに 九三
 やまべにいまは 九三

やまべにをれば 四六
 やまほととぎすをり 四六
 はへて 二五
 やまほととぎすわが 四九
 ことや 四九
 あしべより 八九
 あすかがは 九〇
 ふちにもあらぬ 六七
 ふちはせになる 八八
 あすしらぬ 八二
 あだなりと 二六
 あたらしき 四五
 あぢきなし 九七
 あづさゆみ 二〇
 いそべのこまつ 二七
 おしてはるさめ 二五
 はるたちしより 七三
 はるのやまべを 七三
 ひきののつづら 六〇
 ひけばもとすゑ

あづまぢの 四六
 あなうめに 六五
 あなこひし 六五
 あはすして 六四
 あはぬよの 六三
 あはゆきの 五〇
 あはれてふ 九六
 ことこそうたて 九四
 ことだになくば 二六
 ことのはごとに 八五
 ことをあまたに 七五
 あはれとも 六八
 あひにてあひ 六八
 あひみずば 六八
 あひみぬも 六八
 あひみねば 六八
 あひみまく 六八
 あふからも 六八
 あぶくまに 六八

あふことの 五〇
 いまははつかに 四六
 なぎさにしよる 六五
 もはらたえぬる 六四
 まれなるいろに 六三
 あふことは 五〇
 くもゐるかに 四六
 たまのをばかり 三三
 あふことを 三三
 あふさかの 九六
 あらしのかぜは 九四
 せきしまさしき 二六
 せきにながるる 八五
 ゆふつけどりに 七五
 ゆふつけどりも 七五
 あふまでの 六八
 かたみとてこそ 六八
 かたみもわれは 六八
 あふみのや 六八
 あふみより 六八
 あまぐもの 六八

二〇八
 六三
 八三
 一〇一
 四二
 三三
 八六
 九八
 三四
 三七
 七四
 五三
 七四
 七五
 七四
 一〇六
 一〇七
 七四

あまつかぜ	八三	ありとみて	四四	いつまでか	六三
あまのがは	一七	ありぬやと	一〇五	いでひとは	五九
あさせしなみ	八二	ありはてぬ	九五	いでてゆかむ	七二
くものみをにて	一五	あれにけり	九八	いでわれを	一〇四
もみちをはしに	七	あわゆきの	五〇	いとせめて	五八
あまのかる	八七	あをやぎの	二六	いとしよる	五五
あまのすむ	七	あをやぎを	一八	いとはやも	四四
あまのはら	七〇	い	七〇首	いとはるる	二〇九
ふみとどろかし	四四			いとほやも	一〇五
ふりさけみれば	六三	いかならむ	九五	いにしへに	二〇九
あまびこの	六八	いくばくの	一〇三	ありきあらずは	五三
あめにより	六二	いくよしも	九四	なほたちかへる	七四
あめふれど	二五	いけにすむ	六三	いにしへの	八八
あめふれば	六九	いぎけふは	九五	しづのをだまき	八八
あやなくて	三九	いぎここに	九二	のなかのしみづ	八七
あらたまの	八七	いざさくら	七	いぬがみの	二〇八
あらをだを	六五	いささめに	四四	いのちだに	三六
ありあけの	八六	いしはしる	四	いのちとて	四二
ありそうみの				いのちにも	六九

いのちやは 六三

いはまゆく 六三

いまいくか 四八

いまこそあれ 八九

いまこむと 六九

いひしばかりに 七二

いひてわかれし 七二

いまさらに 七二

とふべきひと 九五

なにおひづらむ 九五

やまへかへるな 一五

いましはと 七三

いまぞしる 九七

いまはこじと 七三

いまはとて 七三

かへすことのは 七三

きみがかれなば 八〇

わがみしぐれに 七三

わかるるときは 六三

いままかも

いまよりは

つぎてふらなむ

うゑてだにみじ

いろかはる

いろなしと

いろみえで

いろもかも

おなじむかしに

むかしのこきに

いろもなき

いろよりも

う

うきくさの

うきことを

うきながら

うきめのみ

うきめをば

三

三八

二二

二六

八九

七二

七二

七二

七二

七二

七二

七二

七二

七二

七二

七二

七二

七二

七二

うきよには

うぐひすの

かさにぬふてふ

こそどのやどりの

たによりいづる

なくのべごと

うたたねに

うちつけに

こしとやはなの

さびしくもあるか

うちわたす(旋)

うちわびて

うつせみの

からはきごとに

よにもにたるか

よのひとごとの

うつせみは

うつつには

うばたまの

六四

六四

六四

六四

六四

六四

六四

六四

六四

六四

六四

六四

六四

六四

六四

六四

六四

六四

六四

わがくるかみや

うめがえに

うめがかを

うめのかの

うめのはな

さきてののちの

それともみえず

たちよるばかり

にほふはるべは

みにこそきつれ

うらちかく

うらみても

うらしきを

うろしうろば

うろしとき

うゑていにし

え

えぞしらぬ

六〇

五

六

三六

三六

一〇六

三四

三

元

一〇二

三六

八四

八五

六六

二七

七六

二首

三七

三七

えだよりも

お

五二首

おいぬとて 九〇
 おいぬれば 九〇
 おいらくの 八五
 おきつなみ 一〇六
 あれのみまさる(長) 九五
 たかしのはまの 二〇四
 おきのゐて 三三
 おきべにも 六六
 おきもせず 三五
 おくやまに 二八
 おくやまの 五一
 いはがきもみぢ 八九
 すがのねしのぎ 七七
 おしてるや 八七
 おそくいづる 九六
 おちたぎつ 九六

歌 詞 索 引

八

おとにのみ 四〇
 おとばやま 四三
 おとにききつつ 一四三
 けきこえくれば 三〇
 こだかくなきて 三〇
 おなじえを 八三
 おほあらきの 一五
 おほかたの 八七
 おほかたは 六六
 つきをもめでじ 三六
 わがなもみなと 一四
 おほぞらの 八五
 おほぞらは 七七
 おほぞらを 八六
 おほぬさと 七七
 おほぬきの 八六
 おほはらや 七七
 おもひいづる 七七
 ときはのやまのいはつ 七七
 つじ 七七

四〇 四三 一四三 三〇 三〇 八三 一五 八七 六六 三六 一四 八五 七七 八六 七七 八六 七七 七七 七七

ときはのやまのほとと 一〇
 ぎす 七五
 おもひいでて 九二
 おもひきや 一〇三
 おもひけむ 九〇
 おもひせく 五三
 おもひつつ 九〇
 おもひやる 五三
 こしのしらやま 九〇
 さかひはるかに 五三
 おもふてふ 九〇
 ことのはのみや 五三
 ひとのころの 六六
 おもふどち 一〇六
 はるのやまべに 二六
 ひとりひとりが 六四
 まとるせるよは 八四
 おもふとも 七九
 かれなむひとを 七九
 こふともあはむ 七九

一〇 七五 九二 一〇三 九〇 五三 九〇 五三 九〇 五三 六六 一〇六 二六 六四 八四 七九 七九 七九

か

六八首

おもふには 五〇
 おもふより 七五
 おもへども 一〇九
 おもはずとのみ 一〇三
 なほうとまれぬ 六五
 ひとめづつみの 七三
 みをしわけねば 五七
 おろかなる 五七
 かがみやま 八〇
 かがりびに 五九
 かがりびの 五〇
 かきくらし 四〇
 ことはふらなむ 五六
 ふるしらゆきの 六四
 かきくらす 六四
 かぎりなき 七九
 おもひのままに 七九
 きみがためにと 八六

五

くもゐのよそに
 かぎりなく
 かくこひむ
 かくしつ
 とにもかくにも
 よをやつくさむ
 かくばかり
 あふひのまれに
 をしとおもふよを
 かくれぬの
 かけりても
 かげろふの
 かすかすに
 おもひおもはず
 われをわすれぬ
 かすがのに
 かすがのの
 とぶひのもり
 ゆきまをわけて
 わかなつみにや

五七
 四〇
 七〇
 五七
 九八
 四三
 一〇〇
 一〇八
 二〇三
 七二
 七五
 八七
 三七
 一八
 四六
 三

かすがのは
 かすみたち
 かすみたつ
 かぜのうへに
 かぜふけど
 かぜふけば
 おきつしならみ
 おつるもみぢば
 なみうつきしの
 みねにわかるる
 かぞふれば
 かたいとを
 かたちこそ
 かたみこそ
 かちにあたる
 かづけども
 かつこえて
 かつみれど
 かねてより

二七
 九
 二三
 九八
 九八
 四四
 三〇
 六二
 六二
 八五
 四三
 八七
 七五
 七五
 三七
 三〇
 九〇
 六三

かのかたに
 かはかぜの
 かはづなく
 かはのせに
 かひがねを
 さやにもみしが
 ねこしやまこし
 かへるやま
 ありとはきけど
 なにそはありて
 かみがきの
 かみなづき
 しぐれにぬるる
 しぐれふりおける
 しぐれもいまだ
 かみなびの
 みむろのやまを
 やまをすぎゆく
 かめのをの
 からごつも

四六
 一七
 二五
 五五
 二九
 二九
 一〇八
 三〇
 三〇
 三三
 二七
 八〇
 九七
 二五
 二六
 三〇
 三〇
 三〇

きつつなれにし
 たつひはきかじ
 なればみにこそ
 ひもゆふぐれに
 かりくらし
 かりごもの
 かりそめの
 かりてほす
 かりのくる
 かれはてむ
 かれるたに
 き
 きえはつる
 きたへゆく
 きにもあらず
 きのふこそ
 きのふといひ
 きみがうゑし

き

四〇
 三七
 七六
 五三
 四八
 四三
 八三
 九三
 九三
 六六
 三三
 四三
 四三
 四二
 九六
 一七
 四二
 九三

きみがおもひ
きみがさす
きみがため
きみがなも
きみがゆく
きみがよに
きみがよは
きみこずば
きみこふる
なみだしなくば
なみだのとなに
きみしのぶ
きみといへば
きみならで
きみにより
きみまさで
きみやこし
きみやこむ

九六
一〇〇
二
六九
元一
一〇四
二八五
六九三
五三
五七
二〇〇
六八〇
元
六五
八五
六五
六五
六五

きみをおきて
きみをおもひ
きみをのみ
おもひねにねし
おもひこしちの
きよたきの
きりたちて
きりぎりす
くさふかき
くさもきも
くべきほど
くもはれぬ
くももなく
くもりびの
くもろにも
くるとあくど
くるるかど

一四首

一〇五
九四
六八
九七
九三
二五
一六
八四
二五
四三
一五〇
七五
七六
七六
四
一七

二

四五首

くれたけの(長)
くれなるに
くれなるの
いろにはいでじ
はつはなぞめの
ふりいでてなく
けさきなき
けさはしも
けぬがうへに
けふこずば
けふのみと
けふひとを
けふよりは
けぶりたち
けふわかれ

一〇三
一〇四
六六
七三
五九
一四
六四
三三
二四
二四
二四
一八
一八
四三
五九

け

九首

こえぬまは
こきちらす
こころあてに
こころがへ
こころから
こころこそ
こころざし
こころをぞ
こしときと
こぞのなつ
こづたへば
ことしより
ことならば
おもはずとやは
きみとまるべく
ことのほさへも
さかずやはあらぬ
ことにいでて
こぬひとを

五八
九三
二七
五三
四三
七六
七
六五
一〇五
一五
一〇九
四
一三
三〇
八四
八
七
七

したのおびの	四〇五	したはれて	三九六	しでのやま	三九六	しぬるいのち	三九六	しののめの	三九六	ほがらほがらと	三九六	わかれをしみ	三九六	しのぶれど	三九六	しのぶれば	三九六	しはつやま	三九六	しひてゆく	三九六	しほのやま	三九六	しもとゆふ	三九六	しものたて	三九六	しもやたび	三九六	しらかはの	三九六	しらくもに	三九六	しらくもの	三九六	こなたかなたに	三九六
--------	-----	-------	-----	-------	-----	--------	-----	-------	-----	---------	-----	--------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	---------	-----

す

一〇首

たえずたなびく	四〇五	やへにかさなる	四〇五	しらたまと	三九六	しらつゆの	三九六	しらつゆも	三九六	しらつゆを	三九六	しらなみに	三九六	しらなみの	三九六	しらゆきの	三九六	ところもわかず	三九六	ともにわがみは	三九六	ふりしくときは	三九六	ふりてつもれる	三九六	やへふりしける	三九六	しりにけむ	三九六	しるしなき	三九六	しるしらぬ	三九六	しるといへば	三九六
---------	-----	---------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	---------	-----	---------	-----	---------	-----	---------	-----	---------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	--------	-----

せ

四
首

すがるなく	三九六	すまのあまの	三九六	しほやきごろも	三九六	しほやくけぶり	三九六	すみぞめの	三九六	すみのえの	三九六	きしによるなみ	三九六	まつほどひさに	三九六	まつをあきかせ	三九六	すみよしと	三九六	すみよしの	三九六	するがなる	三九六	せみのこゑ	三九六	せみののはの	三九六	ひとへにうすき	三九六	よるのころもは	三九六	せをせけば	三九六
-------	-----	--------	-----	---------	-----	---------	-----	-------	-----	-------	-----	---------	-----	---------	-----	---------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	--------	-----	---------	-----	---------	-----	-------	-----

そ

五
首

た

三
五
首

そこひなき	三七三	そでひちて	三七三	そへにとて	三七三	そまびとは	三七三	それをだに	三七三	たえずゆく	三七三	たがあきに	三七三	たがきとに	三七三	たがために	三七三	たがための	三七三	たがみそぎ	三七三	たぎつせに	三七三	たぎつせの	三七三	なかにもよどは	三七三	はやきころを	三七三
-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	---------	-----	--------	-----